



[花き部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

1. 8月出荷作型の夏秋小ギク品種の花蕾数増加効果が高い再電照前の自然日長期間

[要約]

夏秋小ギクの電照・8月出荷作型において、花蕾数増加効果の高い再電照前の自然日長期間には品種間差があり、「はるか」では短く、「すばる」、「精ちぐさ」及び「星の輝き」では長い。「精しらいと」は短くても長くても効果が高い。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 野菜・花研究室

[連絡先] 電話086-955-0277

[分類] 情報

[背景・ねらい]

夏秋小ギクの花蕾抑制栽培において、再電照による上位側枝の花蕾数増加効果は、再電照前の自然日長期間に大きく影響され、品種によって反応が異なることが示唆されている。そこで、夏秋小ギク6品種を用いて、花蕾数増加効果が高い再電照前の自然日長期間を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 電照・8月出荷作型において、6月1日に消灯し、消灯から再電照までの自然日長期間を、「はるか」では6～8日間、「すばる」、「精ちぐさ」及び「星の輝き」では8～10日間、「精しらいと」では6～10日間とすると、上位（第1～6）側枝の花蕾数が増加する（図1）。
2. 上位側枝の花蕾数が増加する場合、自然日長期間中に頂芽の花芽分化が始まっていると考えられ、再電照することによって、頂芽の花芽発達と腋芽の花芽分化が抑制されて二次側枝が発生し、花蕾数が増加すると推察される（図2）。
3. 「精いちき」では、自然日長期間を10日間として再電照しても上位側枝の花蕾数は増加しない（図1）。6月1日の消灯では、花芽分化が始まらないためと推察される。

[成果の活用面・留意点]

1. 岡山県赤磐市で、5月1日に定植し、定植時から白熱電球で電照を行った結果である。
2. 再電照は、白熱電球を用いて、深夜4時間（22時～2時）の暗期中断とし、8日間行う。
3. 消灯日や栽培地によって花蕾数増加効果が高い自然日長期間は異なる。
4. 再電照によって、開花日は遅延する。本年、上位側枝の花蕾数が増加した場合、「はるか」では13～17日、「すばる」では11～12日の遅延となった。本年は花芽発達の時期が高温で経過したために開花が著しく遅延したと考えられ、平年であれば10日以内の遅延になると推察される。



[具体的データ]

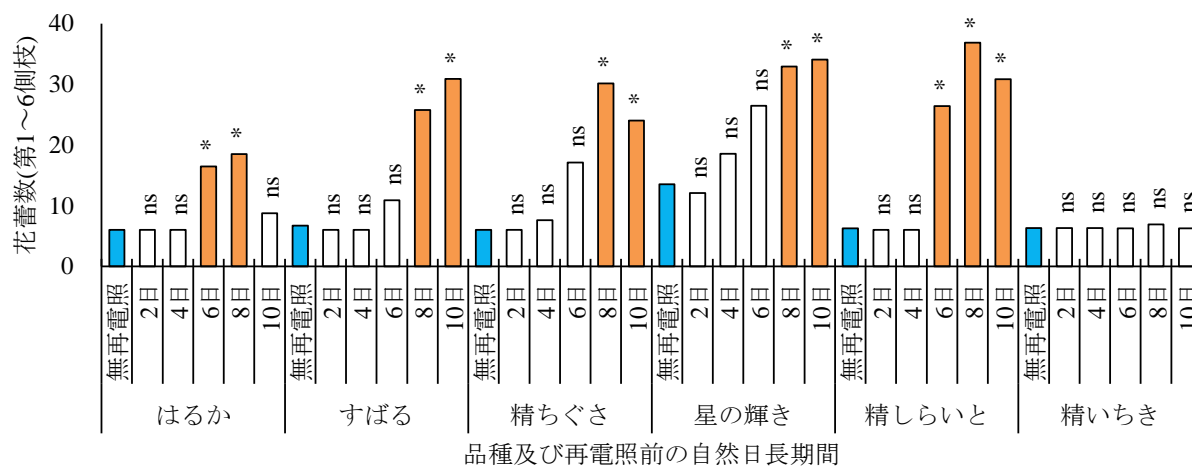


図1 8月出荷作型における再電照前の自然日長期間が夏秋小ギクの花蕾数に及ぼす影響

*、nsは無再電照区との有意差あり、なしを示す(Dunnett法、5%)



図2 再電照が「すばる」の花房形状に及ぼす影響
左：再電照なし、右：再電照あり

[その他]

研究課題名：周年安定生産を可能とする花き栽培技術の実証研究

予算区分：受託（農林水産省プロジェクト研究「食料生産地域再生のための先端技術展開事業」）

研究期間：2013～2017年度

研究担当者：森義雄、笠原有加

関連情報等：1) [平成27年度試験研究主要成果、95-96](#)

2) Mori et al. (2016) Hort. J., 85:264-271

3) 平成29年度試験研究主要成果、○-○